

英国の EMU 参加問題 — オプトアウトに関する一考察 —

指導教員：柳田辰雄教授
国際協力学専攻 47 - 76873 塩尻康太郎

キーワード：EMU、オプトアウト、マーストリヒト条約、「三つの輪」ドクトリン

1. 研究目的 (第一章)

ユーロ誕生から、今年で丸 10 年が経過した。しかし、英国は未だに EMU (欧州経済通貨同盟：European Monetary Union) に参加しておらず、ユーロ圏外に留まっている。EMU に関して、英国は、将来参加する意思を表明しながらも、当面は参加しないとしている。

なぜ英国は EMU に参加していないのか。本稿では、EMU に関して英国が採用してきた政策の実行過程を考察し、その合理性を問う。

2. 先行研究と本稿の立場 (第二章)

EMU に当面参加しないという政策は、「オプトアウト」政策と称される。「オプトアウト」とは、不参加の意思を表明することにより協力制度の構成員たる資格が特定分野で失われることを指す。英国の EMU に関するオプトアウトについては、法学や政治学、経済学等の各学問分野において先行研究が行われている。多くの先行研究は、オプトアウトするか否かという政府の選択に焦点をあてており、その二者択一性から生まれるディレンマ等を指摘している。

しかし、英国の政策実行過程においては、対極的な二つの選択肢の中間的な解決が模索されており、オプトアウトの二者択一性を前提とした議論は必ずしも現実に即していない。

本稿では、先行研究のこの点を批判し、英国が実際に経験した政策実行過程を包括的に考察し、政策担当者の視点に立った実践的分析を行った。

3. 本稿のアプローチ (第三章)

本稿では、英国の EMU に関する政策を「経済外交政策」と捉えたうえで、以下の三つのアプローチが提起している問題意識のもと考察を行った。

①歴史的制度論：現実の政治状況の複雑さを反映したまま、媒介変数たる制度を基礎として、実現された政治的結果を説明する試みである。

②ピーター・A・ホール (Peter A. Hall) の経済政策採用に関する理論：経済政策が実行されるためには、経済的実行可能性、行政的実行可能性、政治的実行可能性の三つの要素が、すべて一定程度満たされている必要があるとする考え方である。

③ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の社会学的観念：行為者たる政策決定者の視点から、動的な政策決定過程を包括的に考察する必要性を説く点に特徴がある。

本稿は、学融合の試みを通して、実践的な研究を企図したものである。

4. 研究概要 (第四章・第五章・第六章)

第四章では、マーストリヒト条約締結交渉過程や保守党内および労働党内の意見対立等、EMU 参加問題に関して英国において交わされてきた議論を考察した。時系列に沿って当時の状況を包括的に考察することを通して、EMU への参加を拒否する姿勢から、EMU への参加意思を明示する姿勢へと事実上方針を転換していること等を示した。

第五章では、英国の国内議論を取り上げ、EMU に関する政策を実行するためには、経済的実行可能性、行政的実行可能性、政治的実行可能性の三つの要素がすべて一定程度満たされている必要があるとの立場から考察を行った。経済界については、経済学的見地からの議論や産業界および金融界における議論の紛糾を取り上げ、官界については、省庁間の意見対立を取り上げた。政界については、保守党および労働党内外における意見対立を取り上げ、EMU 参加問題が政界に大きな変革をもたらしたことを示した。

第六章では、「三つの輪」ドクトリンに着目し、英国が対英連邦諸国、対米国、対欧州という三つの関係すべてにおいて重要な役割を果たす道を模索していることを示した。そして、EMU 参加問題に関して、英国は EMU への参加を当面拒否しているものの、欧州の中での影響力を維持し強化するためにさまざまな政策を実施していることを明らかにした。また、将来 EMU に参加することを明示している点については、英国の EMU 参加により、結果的に英連邦諸国および米国との関係も強化されるとの見解を示した。

5. 結論 (第七章)

本稿は、以下の二点を明らかにした。

第一に、EMU に関してオプトアウトするという政策が、英国政府にとって唯一実行可能な選択肢であった点である。マーストリヒト条約締結交渉においてオプトアウト条項を獲得することが国内での条約批准を成功させるためには必要不可欠であったこと、その後も英国の国内議論が紛糾しており、EMU に参加するという政策は、経済的実行可能性、行政的実行可能性、政治的実行可能性のいずれの

観点からも実行可能ではなかったこと、かつ現在も実行可能ではないことを示した。

第二に、英国の EMU に関する政策は、対英連邦諸国、対米国、対欧州という三つの関係すべてに有益なものとなるよう配慮されており、「三つの輪」ドクトリンの考え方に合致するものであるという点である。

英国は、EMU に関して唯一実行可能な政策を実行しつつ、それが英国の国益増進につながるよう模索しているとの結論に至った。

6. 課題および発展性

本稿の課題および発展性は、以下の二点である。第一に、EMU に関する英国の政策実行過程をより明瞭に整理し、より説得的な議論を展開することである。第二に、欧州以外の地域で通貨統合が実現する可能性が生まれた場合、その地域に属する国が通貨統合に積極的な姿勢を示すか否かという議論を考察する際に、本稿のアプローチを応用することである。筆者は、今後の研究において上記二点を実現したいと考えている。

7. 主要参考文献一覧

佐々木雄太・木畑洋一、2005『イギリス外交史』有斐閣

カ久昌幸、2003『ユーロとイギリス』木鐸社

Adler-Nissen, Rebecca(2008) The Diplomacy of Opting Out: A Bourdieudian Approach to National Integration Strategies, *Journal of Common Market Studies*, Vol.46 (3), pp.663-684.

Blair, Alasdair(1998) UK policy coordination during the 1990-91 intergovernmental conference, *Diplomacy & Statecraft*, Vol.9, No.2, pp.160-183.

Lunn, Jon and Miller, Vaughne and Smith, Ben(2008) British foreign policy since 1997, *Research Paper 08/56*, 23 June.